

| | |
|-----------|---|
| 学科 管理栄養学科 | 所感：本学2年目となった2024年度は、学園が掲げる3つの挑戦『苦手への挑戦、上達への挑戦、未知への挑戦』のうち、様々な未知への挑戦に臨んだ1年であった。TP作成を通して、1年間新たな挑戦をしてきたことの自分自身に対する評価を行い、現状や課題を明らかにすることができたため、今後の教育改善に繋げていきたい。 |
| 氏名 田中優成 | |

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、子どもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することのできる人材を育成することである。

1 教育の責任

私は主に栄養教育論分野を担当しており、家政学部管理栄養学科の教員としては2025年3月の時点で2年が経過した。

右表はオムニバスで実施した科目も含め2024年度に担当した科目である。授業以外にはNRサプリメントアドバイザー資格試験の対策講座、情報教育委員、2年生の指導教員、臨地実習委員、国家試験対策委員、オープンキャンパスの模擬授業、高校生に対する「なるには講座」、系列校の高校硬式野球部およびサッカー部の栄養指導などを担当した。卒業研究では、スポーツ栄養知識質問票の開発や、高校生硬式野球部の食意識と食行動、筋力トレーニングの効果などを中心に行った。

| 科目名 | 開講時期 | 受講者数 |
|--------------|---------|------|
| 未来へつなぐアウトリーチ | 1年通年 | 15名 |
| 栄養教育論Ⅰ | 2年後期 | 71名 |
| 栄養教育論Ⅱ | 3年前期 | 62名 |
| 栄養教育論実習Ⅰ | 3年前期 | 61名 |
| 栄養教育論実習Ⅱ | 3年後期 | 62名 |
| 基礎キャリア教育 | 2年後期 | 71名 |
| 専門実践実習 | 3年通年 | 14名 |
| 栄養実習事前・事後演習 | 3年通年 | 62名 |
| 管理栄養士特論A | 3年後期 | 69名 |
| 臨床総合演習 | 4年前期 | 63名 |
| 管理栄養士特論B・C | 4年前期・後期 | 51名 |
| 卒業研究 | 3年/4年 | 4名 |

2 教育の理念と目的

「食」や「健康」はすべての人が経験し、そして興味・関心をもちやすい分野である。インターネットやSNSが人々の生活と密着した今日では、その多種多様な情報の真意を一人ひとりがそれぞれに吟味しながら生活している。このような社会情勢において、管理栄養士には食や健康の専門家として人々の食行動を科学的に捉え、適切に栄養教育を行っていくことが求められる。

これらのことを踏まえ、私の教育の理念と目的は「多種多様な情報を自ら正しく選択し、人々を望ましい食生活へと導くことができる管理栄養士を育成すること」である。栄養教育の実践の場は、学校や病院以外にも地方自治体や地域ボランティアなど無数に想定される。どのような現場、状況であっても専門家としての見解を分かりやすく伝えられる人材へと自ら成長してもらうため、学びの環境づくりに努めている。

3 教育方法

主に2, 3年次で開講されている科目を担当していることもあり、上記理念の下、管理栄養士として必要な専門的知識を修得させることを目指している。特に栄養教育分野では、これまでに各科目で学修した知識を活用する能力が問われる。そこで、栄養教育論Ⅱの予習ではPCRシート（資料1）を活用して、応用栄養学や臨床栄養学といった分野を超えた基礎知識の復習を中心に行わせている。そして本時では、実際の栄養教育の現場を想定して乳児期から高齢期までのライフステージに合わせた栄養教育の内容を自ら考えさせることを中心に授業を展開している。実際に前期の授業にて立てた計画は後期の実習でそれぞれ媒体を作って発表してもらい、それらに対してフィードバックをしていくことで1年間を通して栄養教育の立案と実施について学修させている。

4 授業改善の活動

全学共通で行われている大学授業評価アンケート（資料2）に加え、授業中に出てきた疑問や理解できなかったことはPCRシート（資料1）に書き込んでもらう形式としている。PCRシートは前回内容のものを授業開始時に回収しているため、学生が栄養教育の内容を考えている時間を活用して全てのPCRシートに目を通し、疑問に対して回答するようにしている。また、そこに書かれていた内容を書き出しておき、次年度以降に授業で説明する際の参考とすることで授業内容の改善を行っている。

5 学生の授業評価

各授業に対して大学授業評価アンケート（添付資料2）を行い、2年生開講科目の栄養教育論Ⅰ、3年生開講科目の栄養教育論Ⅱの一部を抜粋したものを右表に示す。全体的に栄養教育論Ⅱと比較して栄養教育論Ⅰの平均点（Mean）が低く、標準偏差（SD）も高い値を示した。この差は、栄養教育論Ⅰは科目の性質上、概念や技法などの説明が多くなり、栄養教育論Ⅱよりも自由度が低いことが起因していると考えられる。しかし、社会人基礎力を発揮できる授業や、シラバスの一致度、

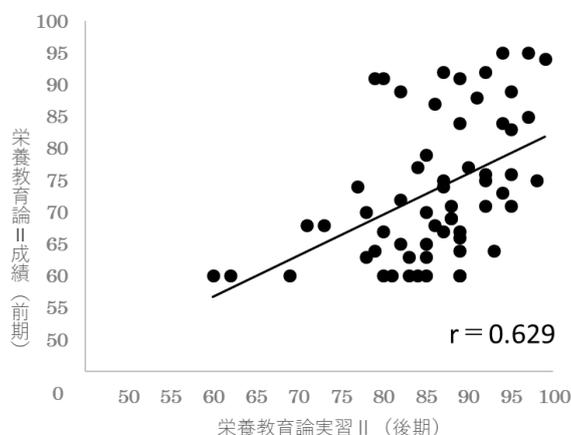
| 評価項目（5点満点評価） | 栄養教育論Ⅰ (n=66) | | 栄養教育論Ⅱ (n=58) | |
|--|------------------|----|------------------|----|
| | Mean | SD | Mean | SD |
| 授業時間分の学修内容を実施していた。 | 4.36 ± 0.17 | | 4.72 ± 0.13 | |
| 説明は明確で理解しやすかった。 | 4.30 ± 0.18 | | 4.69 ± 0.15 | |
| 質問や相談ができるように配慮していた。 | 4.29 ± 0.19 | | 4.66 ± 0.15 | |
| 学生の理解を確かめていた。 | 4.38 ± 0.18 | | 4.60 ± 0.16 | |
| 学生がpisa型学力（知識の獲得・活用・解決）と社会人基礎力を発揮できる授業を展開した。 | 4.29 ± 0.19 | | 4.66 ± 0.16 | |
| シラバスに一致した学修内容を明確にし、授業に取り組んでいた。 | 4.50 ± 0.18 | | 4.71 ± 0.14 | |
| 授業の成績評価基準を明確に説明していた。 | 4.50 ± 0.17 | | 4.72 ± 0.13 | |
| この授業は、あなたにとって総合的に有意義で満足できるものであった。 | 4.32 ± 0.17 | | 4.55 ± 0.18 | |
| あなたは、教員からの学修支援に満足している。 | 4.29 ± 0.17 | | 4.55 ± 0.17 | |

成績評価基準といった項目は授業内容とは関連しないが、低い値となったことに関しては次年度の改善が必要である。昨年度、TPを作成し栄養教育論Ⅱの授業改善を行った結果、今年度は学生からも高評であったため、担当1年目の科目であった栄養教育論Ⅰに関しても、次年度に向けて改善に努めていきたい。

6 学生の学修成果

栄養教育論Ⅰと栄養教育論実習Ⅰ、栄養教育論Ⅱと栄養教育論実習Ⅱはそれぞれ内容が同じで、座学はその基礎を学び、実習はそれを実践的に学ぶ授業である。本年度で栄養教育論Ⅰを履修していた学生は次年度栄養教育論実習Ⅰを学ぶことになるため、3年生の栄養教育論Ⅱ（前期開講）と栄養教育論実習Ⅱ（後期開講）の成績評価を比較した（右図）。

正規性を確認した後、対応のあるt検定によって2科目の成績（100点満点）を比較したところ、前期の栄養教育論Ⅱが73.4±11.1点、後期の栄養教育論実習Ⅱが85.9±8.1点と有意に増加していた（ $p<0.001$ ）。前期はペーパーテストで後期が平常評価であるため、一概に比較はできないが、実際に前期に学修したことを活かして実習へと臨んだことで後期の好成績に繋がったと考えられる。ただし、着目すべきは75点程度まではほとんど斜めに引いた直線上に分布しており、すなわち前期と後期の点数が変わらないことを示している。この周辺に分布する学生を特に注視しながら、全体的に図の右側へと分布を移行していけるような支援を行っていくことが次年度の課題となる。



7 授業科目に関連した教材開発

栄養教育においては、わかりやすく伝わりやすい教材作成も学修内容の一部として含まれる。そのため、授業で用いるスライドや配布資料では、学生が作成する際の見本となるような教材の作成を心掛けている（資料3）。具体的には、基本事項については教科書に沿って説明するものの、教科書に書かれている内容を図式化、スライド化することでどのようなことを伝えたい時にどのような表現をすれば良いのかということを経験を通じて体感してもらっている。また、学生が教材を作成する実習では、どのようなことをすると見えづらく、伝わりにくくなってしまふのかということを実際にわかりにくい教材の例を作成することで伝えるようにしている（資料4）。

8 指導力向上のための取り組み

全学共通でFD研修として行われている公開授業に参加することによって、様々な他教員の授業を見学し自身の授業に取り入れられることを学んでいる。また、先述のとおり栄養教育においては最先端の話を専門的視点から理解しておくことが重要で、常に新しい情報へと授業内容をアップデートしなければならない。そのため私は、日本栄養改善学会、日本栄養教育学会、日本スポーツ栄養学会といった栄養に関する学会だけでなく、日本老年医学会や日本咀嚼学会、日本摂食嚥下リハビリテーション学会など様々な学会に所属し、最先端の情報を仕入れるとともに様々な学術雑誌へ論文投稿するとともに様々な学会で学会発表をすることによって自身の見解を拡げている（資料5）（資料6）（資料7）（資料8）（資料9）（資料10）。

また、今年度は新たな取り組みとして、系列校の高校に硬式野球部とサッカー部を対象に栄養指導を開始した。実際のアスリートが抱える問題や課題などを通じて高校生の実態を明らかにし、今後はそれらを授業に還元していくことで指導力の向上を目指していきたい。

9 今後の目標

自身の教育理念に基づき、まずは学生たち自身が多種多様な情報を自ら正しく選択できる能力を身につけるために、上記の改善点を踏まえて日々の授業で主体的な学びを実践していくことを短期目標とし、そして本学を卒業していく学生が人々を望ましい食生活へと導けるような管理栄養士に成長すること、それらを支援していくことを長期的な目標として掲げる。

10 添付資料

（資料1）栄養教育論ⅡPCRシート

（資料2）大学授業評価アンケート

（資料3）栄養教育論実習Ⅰ授業スライド

（資料4）栄養教育論実習Ⅱ授業スライド

（資料5）地域在住高齢者におけるオーラルフレイルの関連要因—前期高齢者と後期高齢者の比較から—。日本老年医学会誌, 61:68-79, 2024.

（資料6）地域在住高齢者の老人クラブ所属とオーラルフレイルとの関連の検討。老年歯科医学, 38:150-159, 2024.

（資料7）地域在住高齢者に対する健康イベントを継続して実施するための検討—年代、性別間の比較およびイベント実施者の捉え方との比較—。愛知学泉大学紀要, 6:25-32, 2024.

（資料8）老人クラブ会員に対する情報提供が口腔機能や食事摂取状況にもたらす効果。第71回日本栄養改善学会学術総会, 2024.

（資料9）日本におけるスポーツ栄養知識質問票（J-GeSNK）の開発および高校生アスリートの実態。第71回日本栄養改善学会学術総会, 2024.

（資料10）高齢者の不定愁訴と性・年齢ならびに健康の自己評価との関連—地域の老人クラブと連携した研究活動—。第71回日本栄養改善学会学術総会, 2024.